

はじめに

「人を知る手掛かりこそ、ストレス社会に生きる最大の良薬」

個々の人格に関心を向けるより、世襲の地位や財産を守ることだけが関心事だった封建社会しか知らないために、変わらない社会を前提とした文化に浸り続けてきた。主体的に物事を考えなければならない社会に、誰もが当惑しているのはそのためだ。

他人にどう見られているか。ということから、他人をどのように理解するか、その知恵と感覚を身に付けなければ、競争社会に生きていけなくなる。過去を知らない目先の対応だけでなく、未来を予測することすら出来ずに、利己的な満足感に浸ることだけに関心を向けがちになる。

他人を知る手掛かりを持たなければ、自分を反省する態度も身に付かない。逆に他人や社会への不満が強めがちになる。いじめや非行などにそれがあつてきた。

なのに、世間ではそれを気ままだからとか、能力が乏しいからと決めつけがちだ。だが親が理解してくれないという思いを体験して育つほど、見知らぬ他人が理解してくれることなど、想像することすら出来ずに、進路や職場への不安感だけを強めがちになる。

授業への関心が薄く、成績が悪いと決めつけられる生徒に、それがあつてきたから、家庭や学校などに、他人を理解する手掛かりがなければならないと考え続けた。気づいたのは、全世帯に普及するようになった電話帳を利用して、それぞれの家系の分布実態が分かれば、互いに日常的な会話が容易になるという思いだった。

子育てに窮して「勉強しろ」というだけでは、親の生き方への不満と、自身の生き方への不安が増すだけである。親に本当の気持ちを伝えられない辛さで、多くの生徒が虚勢を張って不安を紛らわしている。

良い友達を持つということより、クラスの大の方の家庭に関心を向けている親だと知れば、自分のことも他人のことも話しやすくなる。みんなが持っているからと他人を引き合いに出して、物をねだらなくても済むようになる。

対人関係への不安が薄れることが、発想を豊かにするし、体験から感じ取ることも増やす。職業観が充実するだけでなく、客との応対に自信を強める。仕事の面で期待される存在になっていく。

教えるのが好きだ、という口実で教師を目指す人も少なくない。しかし現実には、今忙しいから後で、と言って生徒の相談を避ける姿がある。父兄会の面談は苦手という弁明もある。だがそうした弁明が払拭されない限り、生き方に自信を強める生徒はいない。

進歩する社会で充実した生き方を可能にするには、幼い頃から多くの人を理解する知恵や体験を身に付けることが重要だ。そうした思いで電話帳を活用し、県内全ての名字の分布状況を、個別にデータ化した。でも全てを印刷する資力を持たないので、同一市町村に百世帯以上ある名字の大の方と、全名字の発祥の由来と多く存在している地域を挙げる程度にとどまった。

参考にさせてもらった文献は、角川書店版「姓氏家系大辞典」などである。これからは「出前、姓氏を語る会」を開催して足りない部分を補っていききたい。

2004年5月

著者

あ と が き

昔は名字が無かった。そう決めつけて遅れた地域の住民であったことを、明治以降の為政者すら言い続けてきた。このことが郷土の歴史に関心を持たなくする雰囲気^{雰囲気}を助長しただけでなく、発展する地域に強い劣等感を覚えさせることにもなった。

確かに、明治3年の「平民ニ苗字ヲ許ス」太政官令も、江戸時代に分家になった家庭では、容易に受け入れられず、明治8年の「……今後ハ必ず苗字ヲ唱エヨ」の布告によらなければならない状況も有ったろう。しかし農村部と言われた地域の名字を調べてみると、大方が姓氏家系大辞典に説明のある名字だ。

それどころか、古代の権力者が一族や支配されていた階層を、中男^{ちゅうなん}作物の収穫や、衣服の材料とか珍しい産物を手にするため、各地に送っていたのではないか。そう思わせる名字が幾つも出てきた。

大相撲の社会では今でも使われる言葉だが、一枚下は虫けら同然、の思想があった時代だから、後の安否について考える度合いが薄かったかもしれない。時代が変わって武家政治の頃になると、先に立つ人ほど過去の慣習を無視し、違和感を覚える相手を夷と決めつけたかったのだろう。

胆沢城設置で4000人が送られてきたという。翌年の志波城設置には、関東地区からの健児(こんでい)500人は、有位者つまり官位のある人や富裕者の子弟が送られたという。それだけでなく、豊受大神宮(今の伊勢外宮)の分霊に神祇官人や封戸などがかなり送られてきた。名字や伊勢国志摩国の地名と対比して、それが分かってきた。

徳川政権のもとで、農村部などは名字を使ってはならない人の集まりとなり、名字の関心を向ける意味がなくなった。こうして過去の文化は消滅してしまった。五人組制度で仲間を監視する風習が定着し、仲間以外には関心を向けなくなった。

昭和の敗戦を契機に、自由な活動を謳歌する社会になって、価値観の切り替えができないのは、外部の人にも文化にも疎かったからである。地域格差の是正には、このことに気づいて考えつく資質を身に付けることが大切だ。

人は誰でも自分の先祖以前のことは無視する。母親から鈴木^{鈴木}の先祖は京都から来たそうだと聞いて育った。その思いが当地の古代史を全く無視する意識に、屈してはならないという気になって、本書の刊行に繋がった。不詳、つまり詳しく分からない名字は説明できなかった。それが何より心残りである。

一時的な滞留を含めて、県内には八千余の名字があるから、多くの人から要請を受けながら、刊行を躊躇し一部の名字の分布しか示せなかったことを詫びたい。

余生は、「姓氏を語る会」の出前をし、各地の人誇りを持ってもらい、生き方に気づく家族や人格を目指していただきたい。その思いの手掛かりになることを念じている次第である。